



「ラブレター」

足し算というものはとても単純だ。掛け算や割り算などという概念はいらない。一足す一は二になる。一人足す一人は二人。所詮は足し算なのだ。流行りの J pop では「僕と君は無限大」なんて言うけれど、そんなのは嘘だ。所詮は一人、そして一人。足し算をして得られるのは「和」だ。調和？平和？意味なんてない、ただ言葉として割り当てられた「和」。

これは、一人ともう一人のお話。

主人公は可哀想な少年一人。この少年は不治の病に侵されていた。その病の名を「虚言症」という。そう、嘘つきなのだ。口を開けば嘘、嘘、そのまた嘘。一体何が本当だったか、最後にはいよいよ少年にまで分らない。それでもなお嘘を重ねる。不治の病と銘打っただけあり、治し方などはさっぱりわからない。いや、そもそもこの少年には治す気など全くないのである。それでも少年が周りに涙ながらに言うには

「いやあ、僕も自分の悪癖には困っているんですよ。でもね、僕はあなたにだけは嘘を言いませんから。本当ですって。信じてください。」

ああ、もちろん嘘だ。この口が達者な少年に、それでも周りは騙され続ける。騙して騙して、そしていずれは嘘がばれて。こんな嘘つきな少年なのである、当然友達はいない。いや、いたのだが、騙せるだけ騙してあとは用済みとでも言いたげに、相手が騙されなくなった途端に少年はその人のもとを去るのだ。そんな不気味な少年に近寄るモノ好きも、最近は尽きてしまっていた。

さて、どうしてこんな不幸な少年が生まれてしまったのか、不思議に思っていることだろう。「きつと何か過去にトラウマが…」「嘘で身を守っているに違いない」少年の周りに近づくものは皆親切そうな顔でそういった。「俺だけはお前を信じてやるからな」と言うものもいた。

「ああ、ありがとうございます。そうなんです、僕、小さいころに正直に叔父さんの浮気を告げ口したら、そこから家族はバラバラになってしまっ…だから、本当のことは言っちゃダメなんだなって、その時知って…」

少年は周りに泣きながらこう言った。周りは真実を知った顔をして、同じく涙を目に溜めながらこう返した。

「そんな辛い出来事があったんだね。だからそんなに異常なまでに嘘をつくんだね。でも、もう大丈夫、僕達には本当のことを言っていんだよ、それが信頼につながるんだから…」

……なあって、もちろん嘘だ。少年に叔父さん一家はいない。父も母も末っ子だからだ。嘘

つきになった理由なんて、少年には分からなかった。生まれついた瞬間から、なのだ。ただ説明するとすれば、「楽しいから」だと少年は言う。それも嘘か本当かは怪しいが、嘘をついているときの少年は本当に楽しそうな顔をしているのだ。

少年曰く、

「だいたい、世の中嘘だらけじゃないか。マジックショーもコントもSF映画も、全部嘘の世界だ。人を楽しませるエンターテインメントの世界っていうのは、人が作り上げた嘘で出ている。それをただ何も考えず楽しんでいる奴らが、どうして僕を嘘つきだなんていう単純な言葉で罵倒するのか、僕にはわからないね。僕はエンターティナーなんだよ、根っからのね。」

少年の言葉には説得力があった、がしかし、それを理由にして人を騙していいことにはならなかった。詐欺師が許されない理由は？と少年に問えば、たちまち適当な言葉を並びたてられてはぐらかされてしまうだろう。

そう、大義名分も、トラウマも何もない。人を騙し通す快感、その悪魔にとり憑かれた。その説明が一番しっくりくる少年であった。

紹介がだいぶ遅れてしまった。この少年の名を「宇佐美真（うさみまこと）」という。現在は高校三年生、市内の県立高校に通っている。嘘つき少年の癖に「真」という名前なんて……と周りは皆馬鹿にした。少年自身も、正直その意見にはこっそりと賛成だった。まさかこんな嘘の帝王になるなんて、生まれたばかりの赤ん坊を見て両親は考えつかなかったのだろう。しかし文句を言いたくても、両親はもうこの世にはいない。宇佐美がまだ赤ん坊のころに二人仲良く交通事故で他界してしまった。とても仲の良かった夫婦だったとのちに聞いたが、何も死ぬ時まで一緒じゃなくてもいいじゃないか……と恨めしく思ってもしょうがない。なんとか親族の手助けを頼りに、一人ポツネンと生きていた。

宇佐美の嘘をつく病気は、もはや病気というよりも「才能」の域に達していた。口からでまかせが次々と、息をする間もなく出てくるのだ。よくもこんなに適当なことがなんの罪悪感もなしに思いついて言えるものだ……と本人でさえその嘘に自信を持ったものである。その才能を、宇佐美はせっかくなので生かすことにした。正確には、周りに親しい人もおらず暇になったので適当に嘘だらけの文章を書いていただけだった。それが、ちよつとばかり評価された。地元の新聞に掲載されるぐらいの小さい賞だったが、宇佐美は一度に複数人を騙せるというこの快感に酔った。特に、ラストのどんでん返しが上手く隠せられるように、その伏線の散りばめ方や言葉遣いに気をまわし決して最後までオチに気づかせないというのが宇佐美の小説の特徴であった。読んだものは口をそろえて「騙された！」と言い、その欺きの技量の高さに感心するのであった。それからというもの、宇佐美は執筆を続け、学生

作家として一部読書家の間で名を馳せた。

これは、良い方向への成長……かに見えた。本人が言っていたとおり、嘘をエンタメへと昇華したのだ。しかし、宇佐美本人の虚言症はそれで治るどころか、ますます悪化してしまった。小説を書くためには知識がいる。色々な参考資料から、小説を書くために必要な知識を吸収する必要がある。まだ学生であった宇佐美は、大量の書物によりどんどん賢くなっていた。そして、「賢い嘘つき」にかなうものはいよいよいなくなった。誰も嘘を見破れなくなったのである。嘘と本物の知識を織り交ぜた宇佐美の話は、ちよつとやそつとの時間では暴けない。宇佐美から聞いた話が嘘だったと知るのはずっとずつとあと、本人のいないところで判明するのだ。そしてそれを詰められても、宇佐美は反省せずまた嘘を重ねる……。もともと周りに人のいない宇佐美であったが、その小説の才能を見出され一躍人気が出たというのに、あい変わらず独りとなつてしまった。宇佐美は文芸部に所属していたが、その文芸部も宇佐美の嘘により混乱に混乱を起こし、ついに宇佐美が三年となるころには部員が宇佐美一人となつてしまった。普通、これだけ部員が少なければ廃部扱いを受けてもおかしくないのであるが、学校側は何度も賞を取る宇佐美の才能をやすやす手放すわけにもいかず、たった一人での部活動が今なお続いているのだった。

放課後、宇佐美は校舎の端っこにポツネンと存在する部室に向かう。いつもここで小説のネタを練つてはメモ帳に殴り書きというサイクルだ。執筆をするのはここではない。快適な家のパソコンで細々とやるのであった。宇佐美は放課後にわざわざ部室に行く必要もない。授業が終わつて、疲れた時はそのまま家に帰つて寝ることも何回もあった。そんな自由な部活であったが、宇佐美はこの部室に愛着があつた。校舎の隅にあり、校庭からも遠いため、放課後特有の喧騒がこの部室にはなかった。それでも、吹奏楽部などの演奏はどうしても音が大きいため聞こえてしまうが、それはそれで趣があつて小説のネタ出しという環境には最適であつた。参考資料は、図書館に行けばすぐに手に入る。先生も見回りに来ないので、隠れてお菓子を食べることもできる。まさに宇佐美の所有する牙城と化していた。

ある日、宇佐美は図書室に参考資料を借りに訪れた。花言葉にトリックが隠された小説を書くためののだが、どうも「花」の図鑑や解説書はあつても「花言葉」がまとめられた本はここにはないようであつた。仕方ない、学校の図書館ではなく町の図書館を利用するか……と諦めて帰ろうとしたところ、常に下を向く癖が災いし、一人の少女とぶつかってしまった。少女はぶつかつた衝撃で、その手に抱えていた何冊もの本をドサドサと、床にばらまいてしまった。普段、誰に対しても尊大な態度をとる宇佐美であつたが、さすがにこれには少しの罪悪感がわいてしまった。必死に本を拾い集めている少女にならい、宇佐美の足元に落ちている本を拾いあげた。

その時、宇佐美が感じたのはまさに運命であった……と言えば聞こえはいいが、そんな感情は後から付け足したものに過ぎない。しかし、この瞬間宇佐美が大変驚いたのは事実である。拾い上げたその手に持った本は、まさしく宇佐美が今の今まで探していた花言葉の本であった。「ああ、他の人に借りられていたのか。それならいくら探してもないはずだ」と同時に宇佐美は理解した。そして、わざわざ町の図書館まで出向かなくてもよくなったことに歓喜した。面倒な手間が減ったのである。

一冊だけを手に取り本を上げしげと眺める宇佐美に不信感を抱いたのであろう、少女がこちらを訝しげな眼で見ている。このままでは変人に間違えられると思った宇佐美は（実際変人なのだが）、咄嗟にお得意の嘘を披露した。

「あ、ごめんね、この本をずっと探していたんだ。僕は新聞部で、今度花言葉の記事を書かなきゃいけなくなつてさ。見つかつてよかったよ……。これ、次は僕が借りてもいいかな？」

「……あら？それはおかしいわ。だってこの学校に新聞部なんて存在しないもの。私、生徒会に所属している人間だから、学校の全ての部活のことは把握しているわ。ありもしない新聞部を騙るなんて、一体どういうことかしら」

「……そう、なんだ。ごめんごめん、間違えた。いや、ホントはね、実は君を試していたんだ。生徒会の人と話せる機会なんてそうそうないからね。君つてばホント、優秀な生徒会員なんだなあ、尊敬しちゃ」

「それも嘘よ」

「……え？」

「あなたさつきから、私を試すとか言いながら私の名前を呼びもしないわ。ホントに試す気なら私の名前を知っているはずよ。それに、あなたの二度目の言い訳には、私が言った情報を上手く利用して返しているだけにすぎなかった。」

「いや、そんなの、たまたまの偶然で……会話におかしな点はなかっただろ」

「ふふ、それがね、あるの。あなたが嘘をついている確実な理由が。……私ね、生徒会役員でもなんでもないわ。新聞部がこの学校にあるかどうかなんて、知りもしない。たぶん、あるんじゃない？知らないけど。でもね、私の嘘を言い訳に使った時点で、あなたの嘘つきは確定よ。」

「なんで……なんでそんな面倒くさい意味のない嘘を」

「あら、その言葉、そっくりそのままあなたに返すわ。私ね、噂を聞いて試しかつたの。

この学校にはとんでもない嘘つきさんがいるって。文芸部の宇佐美君……よね？ごめんなさい、最初からあなたのこと全部知っていたの。」

「……………」

宇佐美は少しの衝撃で、思わずその減らず口が閉口してしまった。「僕が、嘘をつかれた？それも、こんなどこにでもいそうなただの女生徒に。」その時宇佐美が感じたのは紛れもない屈辱と雪辱であった。いまままで様々な人間を騙して嘲笑っていた立場が一転、見事に論理

的に、嘘を逆手に取られて騙されてしまった。ただその場で適当に言い訳する癖が裏目に出てしまった。目の前の少女は勝ち誇ったような、楽し気な目をしていた。それがなおさら宇佐美は氣に入らなかった。

「でも、面白かったわ！」

少女は突然そう言った。宇佐美があっけなく騙される様子がそんなに面白かったというのか。この少女はなかなか酷い性格をしているではないか。

「あなたの話術、とっても素敵ね！お上手、なんて表現したら馬鹿にしているみたいだから言えないけど、本当に言葉巧みに話を展開するのね。私があなたを騙そうって最初に決めてなきや、間違いなく私は騙されていたもの。たくさん賞をもらっている小説家さんは、やっぱりすぐに話を組み立てる才能でもあるのかしら？私はそんな器用なことできないから……単純に羨ましいわ。」

彼女は早口に、まくしたてるようにそう言った。まるで、いや実際に興奮しているようだった。宇佐美は最初こそ馬鹿にされていると感じたが、そうではないようだった。

今まで宇佐美に近づこうとする輩は多くいた。しかしそれは、宇佐美の懐柔や権力目当て、物珍しさなど、負の感情が伴うものばかりであった。それが、この少女はどうだろう。宇佐美を「尊敬する」と言い放ったのだ。この嘘にまみれた汚い少年を、だ。先ほどあっさりと騙された宇佐美は、当然すぐにはその言葉を信じなかった。この少女は本当に心酔したように宇佐美の凄さを騙るが、それも作り物の表情かもしれない。瞬間的疑心暗鬼状態に陥った宇佐美は、少女に冷たい対応をしてしまった。

「嘘が『お上手』なのはそっちの方だろ。なに、僕はあっさり騙されたってわけだ。僕はこんなに嘘つきでありながら、他人が僕に嘘をつく可能性を考慮したことがなかった。まだまだ未熟者だ。僕を尊敬しているとかそんな薄っぺらい誰にでも言えるような言葉はやめてくれよ、聞いてて嫌になるから。」

「そんな、違うわ待って……誤解を与えたのならすぐに謝るわ。私はあなたの小説を読んで、実際にあなたのことが氣になって……」

少女の言葉が言い終わらないうちに、宇佐美は図書館から姿を消した。まるで嘘が見抜かれたのが恥ずかしくて逃げたみたいだと思われていでもしたら最悪だが、あの少女の口ぶりからしてそれはないだろうという謎の確信もあった。宇佐美は、あの少女のことは忘れようとすぐに思った。そして、彼の脳みそは幸せなことに、その実行は容易かった。しかし、簡単に少女から逃れられないことを、彼は数日後すぐに知ることになる……。

それから翌日のこと、昨日のことなんてすっかり忘れ、部室にて宇佐美がのんびりとネタ出しをしていた時だ。

「こんにちは、ここが文芸部室ね？ずいぶん端っこにあるから相当迷っちゃったわ」

「……………ここは文芸部室じゃありません。」

宇佐美はとっさに反応を返せなかった。ただ彼女に口をポカンとあけた呆然としたマヌケ

顔を晒したあと、苦し紛れの嘘をつくだけだった。

「なに？そのマヌケ顔とあまりにも拙い嘘は。あなたが本物の宇佐美君とは思えないレベルね。……今日はちゃんと用事があつてきたの。入ってもいいかしら？」

「もう部屋に入ってきているじゃないか。今から『入っちゃダメです』って拒否すれば出て行くの？」

「拒否される理由が正当ならね。でも残念ね。今日はあなたにちゃんとしたものをお届けに来たのに。」

なに？と尋ねる前に、宇佐美は彼女の手の中にある本を見て察してしまった。それは昨日あの図書室で借り損ねた花言葉の本ではないか。余計なお世話を……もう宇佐美はとくに昨日の帰り道にある市内の図書館で入手済みだ。その証拠に、宇佐美の目の前には今まさにその借りてきた本が置かれている。そのことに相手も気づいたのか、お互い無言だというのに「しまった……。」といった顔をしていた。宇佐美がそんな表情をありありと見せていたのかは疑問であるが。

「あら、もうこれは不要なようね。ただのお節介になっちゃった。」

先に言葉を発したのは向こうであった。彼女の発言通り、ただのお節介ということでこの話にはオチがついた。もう用はないだろうし、あとは彼女が帰るタイミングを待っただけ。と、宇佐美はよく回る頭でぼんやり思っていたが、彼女は予想外な行動をするのがお気に入りらしい。さつきまで立っていた扉付近からスタスタと歩き出し、机を隔てた宇佐美の目の前に着席してしまった。宇佐美の呆然なマヌケ顔二回目である。これ以上この少女は何を宇佐美とおしゃべりする気であろうか。嘘トークならばお得意であるが、おしゃべりは大の苦手である。思わずぐっと身構えた。

「昨日のこと、ごめんなさい。悪気は……正直に言うとおったわ。だって、はっきりとあなたを騙そうとしたのだから。」

突然の謝罪が始まった。今更昨日のことを蒸し返すのはやめてくれと宇佐美は思った。せっかく忘れかけていたとこなのに。

「どうでもいい。心底どうでもいい。嘘をつく気になれないほど本心からそう思っ言うが、本当にどうでもいい。わざわざそれを言いに来ただけ？」

「その表情……どうでもいいっていうより、『蒸し返さないで』とか思ってる？」

失礼な奴め、謝りに来たのか余計に僕に恥をかかせに来たのかどっちだ……。まだまだ彼女の言い訳は続いた。

「私ね、あなたの文章を読んで感動したの。こんな素敵な文章を書いちゃう人って、なんて素敵な人なんだろうってね。はじめて読んだその日から、ずっとあなたのファンだった。まさか同じ学校の同じ学年だったなんて、つい最近まで知らなかったからびっくりしたわ。私の憧れの作家さん……一度会いたいと思っていたの。でもね、あなたについて色々な人から噂を聞いたたびに、余計に心が躍ったわ。どうやら物語の中以外でもたくさんの嘘についてお話を作っているって。その真実を確かめたかったの。」

この少女は、どうやら脳内お花畑で噂を美化しているみたいだ。

「なにそれ、僕のこといい風に解釈しすぎ。僕はただの嘘つき少年。ま、それも嘘なんだけど。とりあえず、君みたいな見るからに優等生そうな人に尊敬されるほど、僕が優れた人間でないのはまあ本当ってとこかな。君もだいたい僕の見た目や話し方で察していないかい？髪はぼさぼさで服も汚い。持ち物もおしゃれじゃない。おまけに嘘つき。友達ゼロ人のクズ。どう、だいたい君が察していた内容とあってる？」

「残念ね、全然違うわ。理想と、じゃないわよ。あなたの推理が。」

「はあ？君は耳に十円玉でも詰まっているの？いや、僕の目に見えないだけで、両目に透明の眼帯でもしていたかな。」

「よくそんな、口から出まかせがスラスラと出てくるのね。」

「待ってくれ、僕がクズなのは僕も認める真実だ。」

「いいえ、あなたは稀代の才能人よ。それに気づいていないのなら私が気づかせて見せるわ。あなたの嘘を、勝手に全力で楽しませてもらうから。」

彼女はそう言葉を吐き捨て、昨日の宇佐美のように突然とその場から立ち去った。台風に直撃されたようだ…。と宇佐美は思った。これで台風が過ぎ去ったわけではない。むしろたつた今、台風の目に投げ出されたところであった。

ああ、また今日も来た……。

こう思うのは何度目だろうか。少女は何度も何度も、やんわり断つてもはつきり来るなど伝えても、めげずにしよげずにそれでも日はおいてから必ずこの文芸部部室に来了。宇佐美は毎回毎回お得意の嘘を披露して少女をかわす。しかし少女にはそれが楽しまれてしまうのだ。しかも宇佐美には厳しいことに、その嘘がことごとく破られてしまうという嬉しくないおまけ付きだ。この少女は、初対面の時に少し感じたことでもあるのだが、酷く聡明であるようだ。単なる知識が豊富なだけではない。論理的な矛盾はすぐに見破られてしまう。矛盾のない完璧な嘘に関しては、持ち前の推理力で本当のことを言い当てられてしまう。

またまた紹介が遅れてしまった。この少女は名前を「角山雅（つのやまささ）」という。宇佐美と同じ、高校の三年生だ。宇佐美が知っている彼女の情報は「元美術部」「推薦により、すでに一流大学への進路決定済み」のたった二つであった。部活もなく受験勉強もない角山は暇なのか、頻繁に部室に来ては宇佐美とおしゃべり（という名の嘘問答）を散々に楽しんでは帰っていく。

「あなたって本当に聡明ね。エジプト神話の話をされた時はさすがに身構えちゃったわ。でも残念。昔それに関する本をたまたま読んだことがあったの。猫の女神の名前はメンヒトじやなくてバステトよ。ちなみにメンヒトは雌獅子の神だったかしら。ふふ、危うくあなたの嘘に騙されるとこだったわ。」

いつもこんな調子で、はつきりと嘘を正し、それでも僕の嘘を褒め、最後には騙されそうだったとか何とかいって結局は騙されない。しかも「昔に本で読んだ」とか「人から聞いた」

とか「なんかちよつと矛盾がある気がするなあ？」とか。いちいち今まで生きてきた中で読んだ全ての本の内容や人とのおしゃべり全部を覚えていてるっていうのか？あまりにも彼女の頭脳は馬鹿げていた。

宇佐美は最初こそ謎の少女の出現に嫌気がさしたが、彼の「非日常を楽しむ」精神は引きどころを知らなかった。これほどまでに騙しても騙してもなお立ち向かってくる人間は、彼の人生史上初めてだった。どうしても角山を欺いてみたかった。これは言うなれば、宇佐美の嘘の精度をあげる訓練にもなった。もつと知識を。もつと論理的思考を。もつと表情豊かに。もつと饒舌に。宇佐美は彼女と出会ってからというもの、より一層勉強に力を入れるようになった。角山よりも賢くなればいいのだろうという、ある種単純な思考によるものだ。

「僕、口がないんだ。」

「それは意外ね！あなたの音はどこから来ているのかしら。」

「知ってるかい？花山総理大臣はゲイって噂らしい。」

「彼は既婚者のはずよ。」

「ゲイバーにいるところを目撃されたい。知り合いの雑誌記者に教えてもらったんだ。」
「だったらその雑誌が発刊されたら信じるわ。」

「自由の女神がある場所、本当はニューヨーク州じゃないって知ってたかい。」

「あら？珍しく本当のような微妙な嘘を言うのね。確かに裁判でリバイー島の周辺の水域はニューヨーク州のものだとされたけど、島の陸地はもともとニューヨーク州のものよ。残念、少し知識不足だったわね。」

角山はいつも宇佐美の嘘に笑顔を返した。まだ宇佐美の嘘が角山に通じたことはない。宇佐美の嘘は、もう常人には看破できないレベルに達していた。それでもまだ足りないのだ。そう、角山の言い方を借りるならば、これは宇佐美と角山の「おしゃべり」でしかないのだ。宇佐美も角山も、この放課後の会談を「楽しい」と感じていた。それは、お互いの表情を見れば明らかだった。

「今日は君の夢を見た」

「あら、もしもその話が本当だったら嬉しいわね」

「……どうして？」

「どうしてって……変な質問ね。それだけ相手の印象に残っているということの証だからかしら？昔は、夢での逢瀬こそ両思いのしるしとされていたわけだし、ロマンチックよね。それで、宇佐美君は私のどんな夢を見たの？」

「君がもうここに来なくなる夢だった」

「ふーん……それで、あなたはもう思った？」

「え？僕の夢に、僕が感想を述べなきゃいけないのかい。面倒くさいな。まあ、そうだな、夢は願望の表れとも言える。部室の邪魔者である君がいなくなってもいいからいいわね」

「ふふふ、分かりやすい嘘ね」

宇佐美はカァッと頬が赤くなるのを感じた。それがどういう現象なのかは、よく宇佐美には理解できていなかったのだが。

「表情がまだまだだね。そんなに目をキョロキョロしながら言っていたら、私じゃなくても嘘だってばれちゃうわ。どこからが嘘なのかしら？私がいなくなってもいいからいいわね」ところ？それとも、最初からそんな夢なんて見なかったのかしら。」

「最初からだよ。君の夢なんて見てない、ただ、君をからかってみただけだ。君がそんな夢を見られたことに嫌気がさしてここに来なくなるかもしれないという一抹の希望にかけただけ。そんなに上手く行くとは最初から思ってたけど。今日は急ごしらえて嘘を考えたらあまりよくなかったかも……。ふん。」

「なんだかあなたの表情を見ていると、今の言葉すら嘘のように思えてくるわ。本当に私の夢を見なかったの？」

「……………」

いつしかこうした会話をした。宇佐美はその後、なんと返したか覚えていないそう。きつと気が動転して、適当な嘘を並べ立ててごまかしたんだろう。そして、そうした会話をしたちやうどそのあたりから、宇佐美には明確な変化が訪れていた。角山を騙すために毎日毎日嘘を考えていた宇佐美は、いつしか角山のこと自体を考えるようになっていた。相手を騙すためにまずは相手のことを知ろうという宇佐美らしい狡賢い策である。しかしその術中に術師がはまってしまった。寝ても覚めても、気づいたら角山のことばかりを想っている。もちろん嘘の構想に利用するためだ、と頭では分かっているのだが……。角山は今何をしているのだろうか。今日は何を食べたのだろうか。誰とどんなおしゃべりをしているのだろうか。今日は、いつごろこの部室に来るかな。そうだ、彼女がよく好んで食べるお菓子を用意しておかねば……。ここまで考えたところで、宇佐美は自分の思考のオートメチックさに気づき絶望する。こんなのは、まるで恋する乙女の思考法である。違う、と宇佐美ははっきり否定する。彼女とは、ただのおしゃべり仲間、放課後に会って、僕が嘘をついて、彼女がそれを暴いて。僕は嘘の練習に。彼女は物語を楽しむに。そう、持ちつ持たれつの関係……。今が一番楽しいのだ、彼女が僕と普通に接してくれるたつた今が。それを喜んで壊すような馬鹿なことを、一体誰がするだろう？今日も一人、そんなことを考えながら部室で待つ。

「4組の田中一郎君を知っているかい？彼は、どうやら君のことが好きらしいよ。」

「その人のことは知っているわ。しゃべったことはないけど。私はその人の友達ととして仲がいいの。だから、彼が既に彼女持ちなことを知っているわ。はい、また今日も私の勝ちね。」

「……そうだね、ご名答。まあ田中君が彼女を溺愛しているっていう噂は有名だからね、見破られてもしょうがなかったかもしれない。ところで、もしも、本当に彼が君のことを好きだったとして、君はどういう反応をとるの」

「なんだか最近、私に対して変な質問をよくするのね。それがあなたの中で流行っているのかしら？ そうね……ま、田中君に彼女がいなくて言うんだったら、少しはまともに考えていたかもしれないわね。」

「趣味悪いな。あんなゴリラみたいな男のどこがいいんだ。まるで全身が筋肉みたいじゃないか。」

「趣味が悪いのはあなたのほうよ。彼のいないところで全身筋肉ゴリラだなんて悪口を言うのは感心しないわね。あのね、彼の見た目なんか重要じゃないわ。問題は私のことが好きかどうかでしょう？ 告白されれば、誰だってうれしいものよ。あなただってそうでしょう？ いや、あなたは……孤独な人だから、誰からも告白なんてされたことないかしら。」

「あるよ、そんなの、僕にだって一度や二度ぐらい。あれは僕が中学二年生だったころ、放課後にクラス一の美少女から屋上に呼び出されて……」

「見栄を張った嘘ほど悲しいものはないわよ？ 最近の学校の屋上は危険だから学生が入れないように封鎖されているの。それぐらい知っているでしょう？」

「……僕は独りで寂しいと思ったことはない。それは本当さ。この世に恋愛小説はたくさんあるだろ？ 僕は一応、小説家の端くれだから参考に色々読んだけどさ。読んでいて吐き気がしてくるんだ。あんな、お互いに想いあつてすれ違って、またくっついて……。馬鹿くさくて面倒くさくてしょうがない。さつさと告白でもなんでもすればいいじゃないか。素直に自分の気持ちを言っていればトラブルなんて起きないんだよ。うじうじしてて気持ち悪い。」

「ひねくれもののあなたが「素直に言えば」なんて発言、とんだ皮肉ね。あなたは本当に恋愛小説が嫌いなのか？」

「嫌いなさ。」

「懂れる、とも思わないのか？」

「思わない。」

「そう……私は恋愛小説、好きだけどなあ。」

「えっ？ そう……なんだ。ロマンチックなものが好きだったりするの？ ふーん、まあ……君には似合っていていいんじゃないの、別に。」

「それは嘘？ 本当？」

「本当さ。」

「嘘なのね。……最近のあなたは、反対の意味で正直すぎて気持ち悪いわ。」

「反対の意味で正直？ まったく意味が分からないな」

宇佐美はおどけてそう言った。内心は冷や汗でたまらなかった。さつきから僕は何を言っているんだ？ という疑問でいっぱいだった。僕のどの言葉が本当で、どの言葉が嘘なんだっけ？ もう宇佐美には分からなかった。それこそ、角山に暴いて欲しかった。

その後角山は「つまらないから帰る」と言って帰ってしまった。

その晩、宇佐美は初めて眠れぬ夜を体験した。嫌われてしまった……。とまるで子供みたいな純粋な落ち込み方をした。角山のことが分からない。それと同時に、宇佐美が角山のことをどう思っているのか、角山とどうなりたいのか、いよいよ分からなくなった。明日もまた来てくれるのだろうか、どんな話をすればいいのか。やっぱり今日、恋愛ごとの話を振るのはやめておけばよかったか。さまざまな後悔がとまらない。宇佐美が「他人」に悩むことも、これが初めてだった。ここまで宇佐美が認めて「仲良く」なった人も初めてであった。

彼女への興味は、好奇心と尊敬で構成されていることが宇佐美の見解であった。角山は謎の女性である。ほぼ毎日というほどの会談をしているというのに、彼女について分かったことは雀の涙ほどに少ない。それは、彼女が自分のことを聞かない限りは答えないためだった。

彼女の反応を想像しながら話をするのが困難と思うほどまでに。そして、その中で確実に分かることは彼女が聡明だということだ。前にも思ったことであるが、彼女の記憶力はずば抜けている。この世のすべての本、すべての会話、すべての歴史を覚えていたようだった。

まるで魔女のような女性だ。その怪しげな能力に対して「魔女」と称するのは間違っているいだろう。それは同時に尊敬につながった。いつまで経っても彼女の知識量に追いつける気がしない。宇佐美がさまざまな知識を学習するそれと同時に、彼女も別の場所でもた賢くなっているのだ。彼女の時間だけ都合よく止まってなどくれない。この差は永遠に埋まらない。そしてそれは哀しいことだということに宇佐美は気づいた。この壁は、この溝は、越えられないものなのだろうか？ 天に聞こうとも、誰もその答えはくれない。やはり神様なんてクソくらえだ。一人の少年が困っているときに手を差し伸べてくれることなどないのだから。救いの手は、僕自身が用意しなければならない。

「もう彼女は部屋に来てくれないかも」

そうかも知れないね。

「彼女は恋愛小説が好きなんだって」

意外だったね。でもこれは重要なヒントさ。

「僕の小説のファンだとも言っていた」

彼女には、君の書いた文章しか届かないんだろう。それが「本当」なんだから。

「君の役目は限界かもね。ここに来て、僕は解法に気づいたよ」

最初からそれは提示されていたんだよ、がんばってね、もう一人の僕。

僕は正直に、彼女についての想いをここに述べよう。もうこんな、小説の体裁を保つのはやめだ。だってどんなに第三者視点で描こうとも、結局は君への思いで溢れてしまうのだから。僕は君を楽しいおしゃべり相手であることは認識している。しかし、時が経つほどに、君とおしゃべりが純粋な気持ちで楽しめなくなった。もっと君のいろんなことが知りた。もうちよつと言つと、君と手が繋ぎたい。君の推理どおり、僕は誰とも恋愛をしたこと

がないさ。恋愛を楽しいものだとも思っていなかった。でもきつと、君とだったら楽しい。僕は君に出会うまでは完璧な嘘つきだった。そんなこの僕がどういうわけか、君と出会って正直者になっちゃったんだ。君はまたつまらないといって逃げるのかな？そのときは諦めるよ。どうか君に、この嘘と僕の本心を暴いて欲しい。この小説を読んくれた君はどう思ったかな、気持ち悪いといって軽蔑するのかな。僕は君がわからない。それでも僕は、ここに君との全てを詰めたつもりだ。聡明な君がこの感情に答えをくれることを願って、この小説ラブレターを、僕のファンだと言う君に、今から届けに行くよ。

一足す一の答えは、二ではないという嘘を信じて。

宇佐美 真